ふるさと歴史館第38回企画展

舟塚山古墳の埴輪

令和６年

10月9日▶12月27日

月曜休館（祝祭日のときはその翌日）
午前10時～午後４時30分
入館無料
展示解説　10月12日（土）
午前10時30分～

石岡市立ふるさと歴史館

茨城県石岡市総社 1-2-10 石岡小学校敷地内
電話　0299-23-2398

下図：井 博幸 2024「茨城県舟塚山古墳採集埴輪の再検討」『茨城県考古学協会誌』第36号　図3

石岡市立ふるさと歴史館 第38回企画展

舟塚山古墳の埴輪

■目次

はじめに　1
Ⅰ　舟塚山古墳　2
Ⅱ　埴輪の種類と変遷　6
Ⅲ　円筒埴輪と朝顔形埴輪　9
Ⅳ　円筒棺　11
Ⅴ　形象埴輪　11
Ⅵ　舟塚山古墳の年代とその時代　13

■例言

本冊子は、令和６年(2024)年10月９日から12月27日に開催する石岡市立ふるさと歴史館第38回企画展に際して作成したものです。

展示および本冊子の執筆は、Ⅰを梶原悠渡・有水祥真・鬼海啓英（早稲田大学文学研究科）、Ⅱを大内みなみ（筑波大学、石岡市教育委員会 文化振興課 会計年度任用職員）、そのほか及び全体の構成・編集を谷仲俊雄（石岡市教育委員会文化振興課）が行いました。

展示にあたっては、井博幸2024「茨城県舟塚山古墳採集埴輪の再検討」『茨城県考古学協会誌』36を参考にしました。舟塚山古墳の埴輪に関する所見は同書によるものです。

舟塚山古墳の埴輪

舟塚山古墳は、東日本第2位の規模を誇る前方後円墳です。その規模から古くから注目され、大正10年（1921年）には全国で初めて指定を受けた48件のひとつとして国の史跡に指定されました。

では、舟塚山古墳が築造されたのはいつなのでしょうか。代表的な見解を発表された年代順にみると、「6世紀中葉前後」（1964年）、「5世紀中葉」（1976年）、「5世紀中ごろから後半期」（1985年）、「5世紀前半代」（1994年）、「5世紀第1四半期」（2012年）、「5世紀初頭を前後する時期」（2024年）と、当初は6世紀代と考えられてきたのが、5世紀でも古い時期と考えられるようになってきています。

その年代観の転換のきっかけとなったのが、1976年に田中新史氏によって採集され、車崎正彦氏によって報告された埴輪研究の成果です。このたび、その埴輪を含む土筆舎同人（田中新史・白井久美子・永沼律朗・小出紳夫の諸氏）および井博幸氏が採集された埴輪を石岡市にご寄贈いただきました。

今回の企画展では、これら埴輪を紹介するとともに、舟塚山古墳の築造年代やその時代について考えます。

また、石岡市教育委員会は早稲田大学と合同で、令和5年2～3月に舟塚山古墳の測量・地中レーダー調査を実施しました。その最新の調査成果も合わせて紹介します。

舟塚山古墳の測量・地中レーダー調査

早稲田大学　梶原悠渡 有水祥真 鬼海啓英

1．舟塚山古墳の調査

舟塚山古墳は、茨城県石岡市にある前方後円墳です（図１）。古墳の近くには、恋瀬川や高浜入りがあり、舟塚山古墳の頂上からは霞ヶ浦を一望することができます（図２）。舟塚山古墳の墳丘の長さは 185m、後円部の高さは 11mほどあり、東日本で第２位の規模を誇ります。全国的に見ても大型の古墳であることから、舟塚山古墳の被葬者や古墳が築造された時期について様々な調査・研究が行われてきました。早稲田大学は、2023 年２月 27 日～３月 19 日（21 日間）の期間、石岡市教育委員会と共同で調査を実施しました。

図１　舟塚山古墳周辺の立地

図２　茨城県石岡市舟塚山古墳の航空写真

２．墳丘の測量成果

舟塚山古墳の調査は、まず墳丘の測量を実施しました。早稲田大学は、測量機器を使用して地面の上を１点１点計測し、緯度・経度・高さの情報を「点」としてデータを収集する 「点群測量」と呼ばれる方法を用いて古墳の形を調べます。図３左は、今回の調査で取得した点の集合（＝点群）であり、調査範囲全体で合計 173,411 点を取得しました。取得した点群は、GIS（＝地理情報システム）を用いることで等高線図を作成できます。図３右は 10 ㎝間隔の等高線と、地表面の傾斜に応じて色分けした図を合成したものです。平坦な部分が緑色で、傾斜がきつくなるにつれて茶色になり、古墳の形を立体的に表現することが出来ます。墳丘の形は、台形の前方部と円形の後円部が接続する「前方後円墳」という形状です。また、墳丘の段築は、平坦な面が１段、２段、３段と３つの段を持つ「三段築成」であることが分かります。墳丘の周囲は、後世の土地の改変などによって一部が削平されていますが、舟塚山古墳が築かれた当時の形を良好に留めていることが分かりました。

このように、詳細な測量調査を行った結果、舟塚山古墳が作られた当時の大きさや形状を把握するための手がかりを得ることが出来ました。

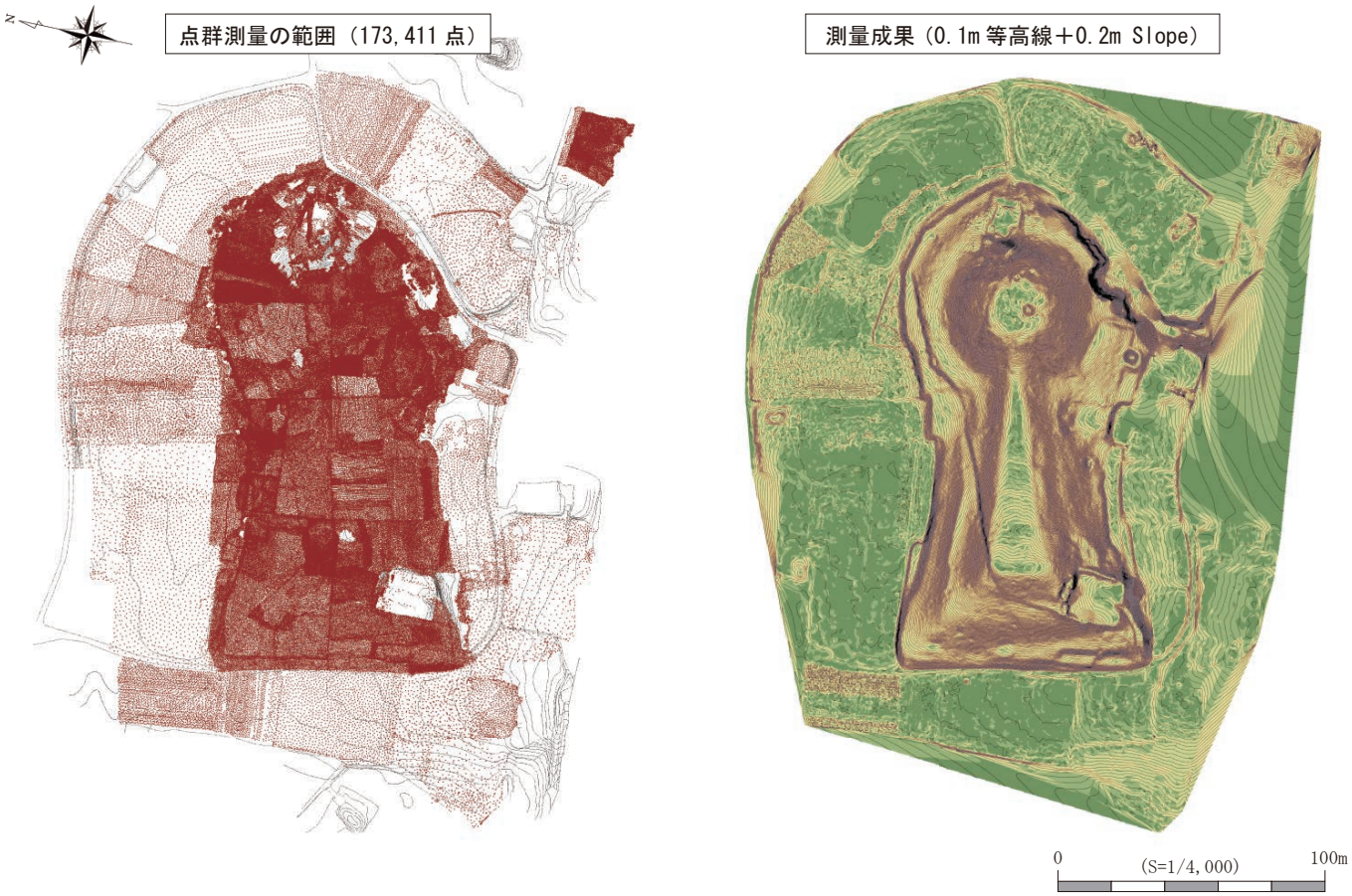


図３　舟塚山古墳の測量成果

３．墳丘の地中レーダー探査成果

地中レーダー探査は、電磁波を利用して地中の埋蔵物を調べる方法です。発掘調査のような破壊を伴わずに地下の構造・埋蔵物を把握できる利点があり、考古学における遺跡調査の技術として用いられています。早稲田大学は、古墳調査でこの技術を積極的に活用しています。舟塚山古墳の調査期間中も、古墳の構造を立体的に分析するためのデータを得ることを目的に、墳丘の地中レーダー探査を実施しました（図４）。図５は等高線と地中レーダー探査の成果を合成したものです。調査の結果、後述する埋葬施設の反応や、古墳の段構造を確認できました。

図４　地中レーダー探査の作業風景

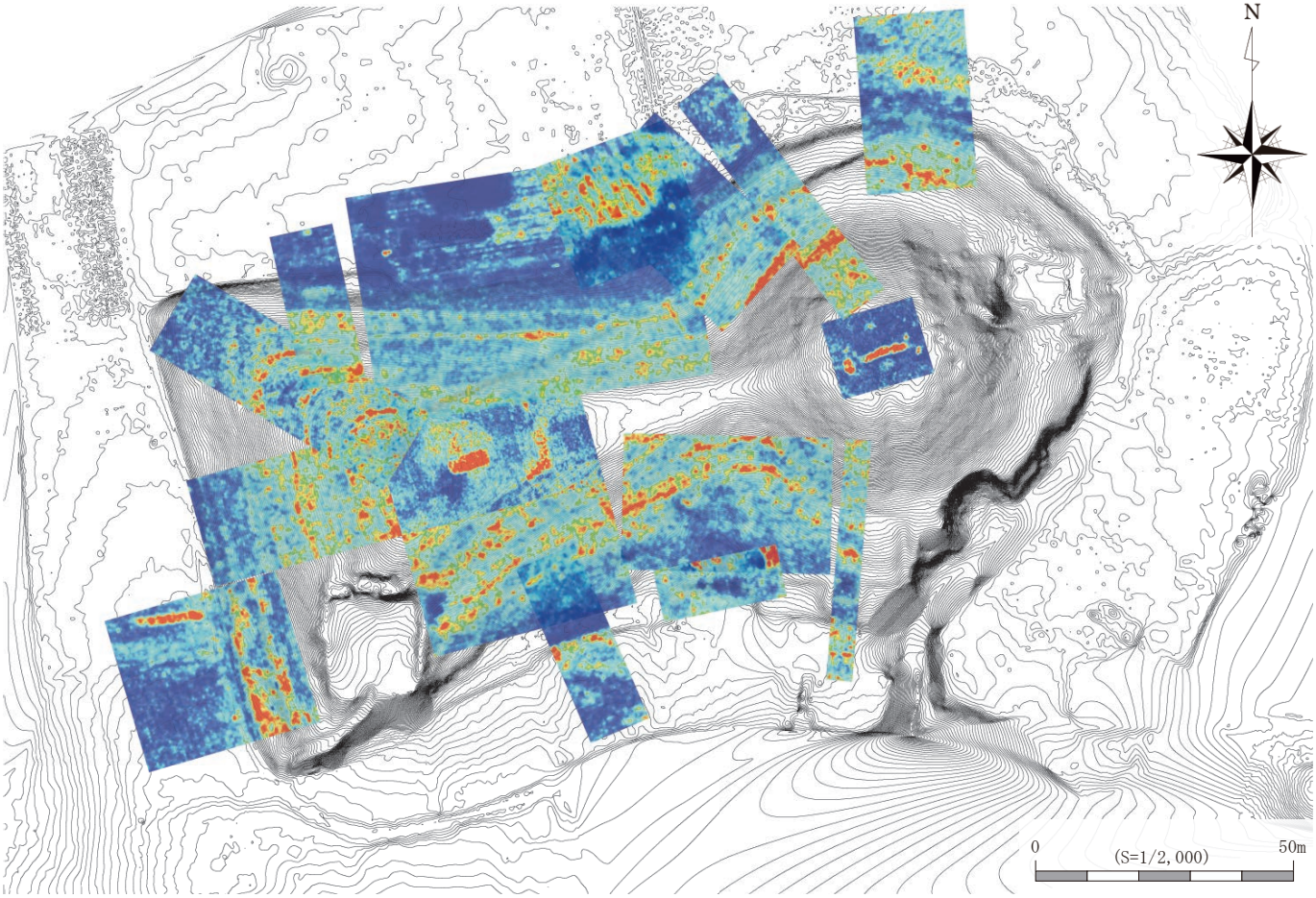


図５　地中レーダー探査の成果

4．埋葬施設の地中レーダー探査成果

調査期間中は、舟塚山古墳の埋葬施設を調べるために、墳丘の頂上にて地中レーダー探査を実施しました。その結果、後円部の墳頂に、「粘土槨」という埋葬施設の可能性が高い反応を検出しました。図６は後円部墳頂のレーダー平面図と断面図になります。図６右の断面図は、図７の例に挙げた竪穴系の埋葬施設とよく似ています。また、埋葬施設の付近からは、副葬品を埋納した可能性が高い反応も確認しました。一方、前方部墳頂の地中レーダー探査でも、図８のように、埋葬施設と想定する反応を検出しました。

以上から、舟塚山古墳は後円部と前方部の両方の頂上に埋葬施設を持つことが分かりました。

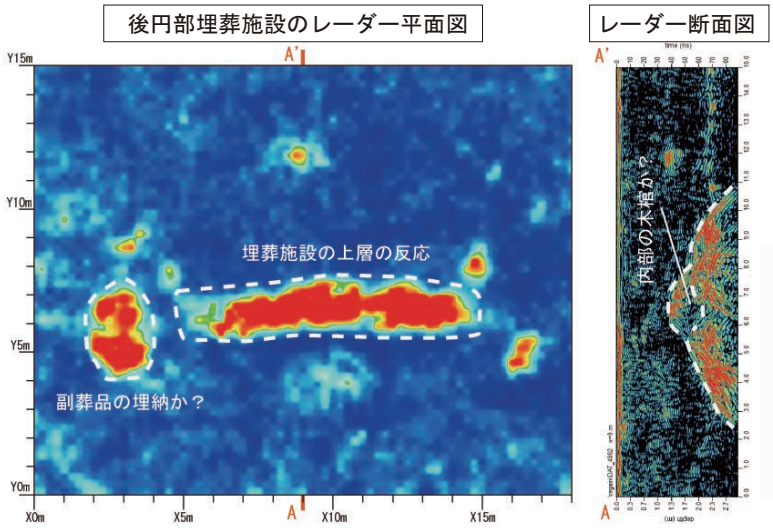


図６　後円部墳頂の埋葬施設

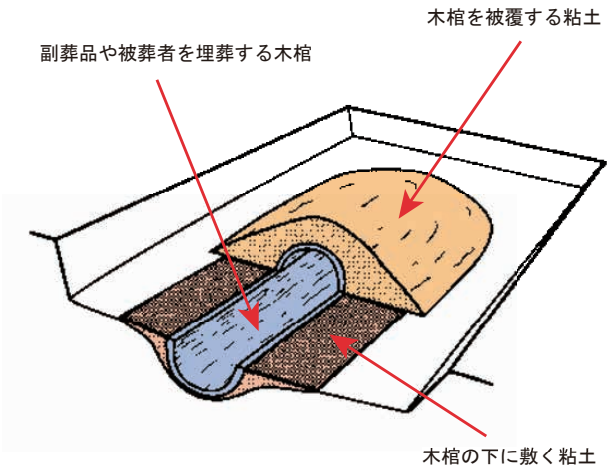


図７　粘土槨の例

（上田直弥 2022『古墳時代の葬制秩序と政治権力』p. 175 図 78 より引用）

5．調査成果のまとめ

今回の調査は、舟塚山古墳が三段築成の前方後円墳であること、前方部・後円部の墳頂に埋葬施設を持つことを明らかにしました。これらの成果は、舟塚山古墳の歴史的位置付けを考える上で重要な知見になります。現在は、報告書の作成に取り組んでおり、今後は、出土遺物などの情報も併せて舟塚山古墳の年代を検証していきたいと考えています。

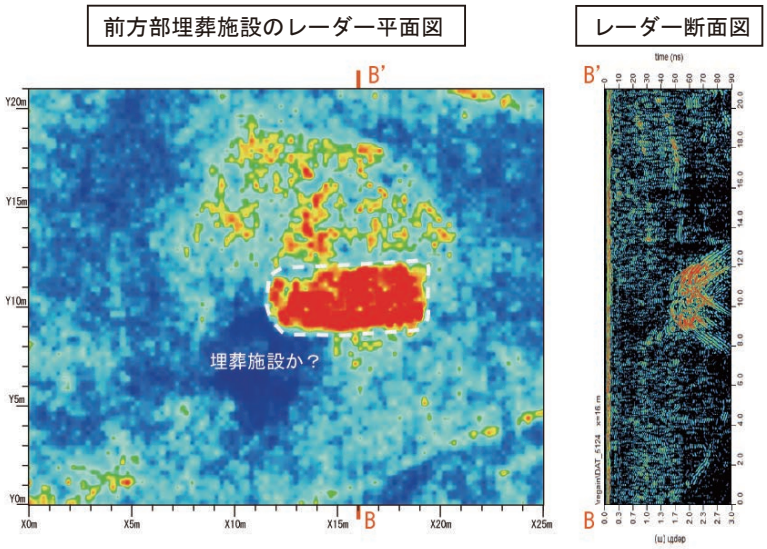
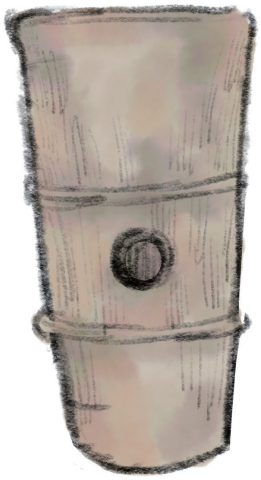


図８　前方部墳頂の埋葬施設

埴輪の種類

埴輪とは、古墳時代に製造された素焼きの造形物のことです。
古墳の墳丘や造出（つくりだし）部の上に並べられていました。
埴輪には様々な形があり、大きく円筒埴輪と形象埴輪に分けられます。
そのうち形象埴輪は人物埴輪・動物埴輪・器財埴輪など、細かく分類されます。



◀円筒埴輪

円筒埴輪はその名の通り、円筒形をした埴輪です。
弥生時代の特殊器台を起源に持つとされ、埴輪の中では最も早く出現し、最も多く生産されました。
円筒に沿って１周している突出部を「突帯」（とったい）、側面に開けられた穴を「透孔」（すかしあな）と呼びます。

人物埴輪▶

形象埴輪の一種で、人物を模した埴輪です。
有名な「踊る埴輪」も人物埴輪に分類されます。
人物埴輪の中でも様々な種類があり、大刀や甲冑を身につけた武人の埴輪や、女性の巫女埴輪、盾を持った盾持人（たてもちびと）の埴輪などがあります。

埴輪の種類

▲動物埴輪

埴輪に表現された動物は馬・水鳥・犬・鹿・猪・魚・ムササビなど多種多様です。これらをまとめて動物埴輪と呼びます。
動物埴輪の中では馬形埴輪が最も多く、豪華な装飾が施されている例も見られます。当時の日本列島における動物の姿を伺うことができます。

家形埴輪▶

家の形をした埴輪です。古墳時代に実際に建てられていた家よりも、強調して表現された埴輪が多く見られます。

◀器財埴輪

器財埴輪とは、盾や大刀、靫などの武具や、蓋（きぬがさ）、翳 (さしば) などの器物を模した埴輪です。

蓋（きぬがさ）…古代の傘
翳 (さしば)…古代のうちわ

円筒埴輪の編年

円筒埴輪は埴輪の中で最も多く生産され、多くの古墳で大量に立て並べられていました。つまり、円筒埴輪の編年を基準にすることで全国の古墳を同一基準で比較することができます。川西宏幸が発表した「円筒埴輪総論」（川西 1978）で、各地域の円筒埴輪の編年が示されました（「川西編年」）。
川西編年では、円筒埴輪の製作技法のうち、内外面調整・底部調整・突帯（凸帯、タガ）・透孔・焼成法に着目して分類しています。ここではそのうち、透孔と焼成について見ていきます。

透孔

透孔の形は円形・方形・三角形・逆三角形・半円形など様々です。全国的な傾向では、方形・三角形・逆三角形・半円形が古く、それが円形に統一されるようになるようです。
舟塚山古墳の円筒埴輪では円形と方形の透孔が確認されています。

焼成法

埴輪の焼成法は野焼きと窯焼きの２つがあり、時期によって異なります。前者で焼いた埴輪には黒斑（こくはん）が付着することがありますが、後者で焼いた埴輪には基本的に黒斑は付着しません。つまり、黒斑の有無によって埴輪の焼成法を判別することができ、時期の特定に繋げることができるのです。

第11表　関東および周辺の円筒埴輪編年

	I	II	III	IV	V	
駿河					長塚	
相模					向ヶ崎 蓼原	
武蔵			野毛大塚	生野山 横塚山 御岳山	千光寺1・3号 大稲荷1号 埼玉稲荷山 将軍塚 二子塚 岩鼻 諏訪山2号	十二ヶ谷戸3・4・10・15号 城戸谷1・2号 大御堂稲荷塚 大町8号 酒巻 三千塚 諏訪山4号 ひさご塚
上野		朝子塚	白石稲荷山 赤堀茶臼山 お富士山 太田天神山	七輿山 不動山 二ツ山	鏡石 綿貫観音山 八幡原北	富岡5号 若宮9号 采女塚1号 オクマン山
下野				笹塚 桑57号	牛塚 摩利支天塚 琵琶塚	
上総				弁天山 内裏塚 清見台A4・8号	古塚 九条塚 南向原4号 殿塚	山倉1号
下総					東深井7号 花野井大塚 金塚 久寺家 天神台2号 片野11号	油作2号 鷺沼A号 柴又八幡神社 目沼7・11号※ 七塚6号 高野山1～4号 猿山2号 片野23号 城山1・4号
常陸		舟塚山		馬渡C区	宍塚5・6号 舟塚 三昧塚 馬渡A・B区	

※地理上は武蔵に所在する

▲関東および周辺の円筒埴輪編年
川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64 巻 2 号 141 頁

円筒埴輪

樹立状況

舟塚山古墳では、墳丘の全面において円筒埴輪が採集されます。その採集状況からは、三段の平坦面すべての縁部に円筒埴輪列が立て並べられていたと考えられます。

焼成

色調は褐色、茶褐色、黒褐色などで、比較的軟質なものが多いです。黒斑も多くの破片で観察されることから、野焼き焼成と考えられます。

規格性

大型円筒埴輪の平均的なサイズは、底径28cm、円筒部径31cm前後、段間隔（突帯間の間隔）16～19cmの4条5段構成で、器高は90cm前後と考えられます。

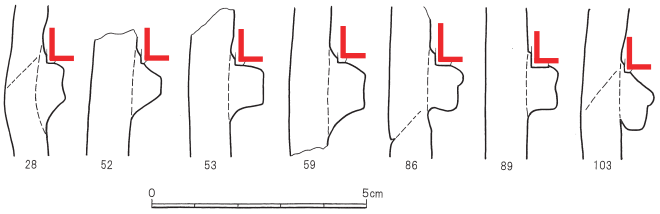
段間隔の設定

段間隔が一定ということは、突帯を貼り付ける位置が決められていたと考えられます。どのように決めていたか、その手がかりとなる痕跡があります。突帯が剥がれたものを観察すると、そこには浅い線が刻まれています。これが突帯の貼り付け位置を示す線（設定線）と考えられます。

一方、底面付近の外面には、こすってできたような痕跡（「擦痕」）があります。これが下から1つめの突帯の位置を設定するための工具の下端があたった痕跡と考えられます。

また、突帯の上面には、浅い直角断面の痕跡があります（右図）。これも工具の下端があたった痕跡と考えられます。

これら痕跡から段間隔設定のための工具は、直線定規形の平らな板状で、その上端付近には設定線を引くための目釘状の突起物が差し込まれていたと推測できます。



▲突帯の上面基部に残る段間隔設定工具痕と断面形
井博幸2024「茨城県舟塚山古墳採集埴輪の再検討」『茨城県考古学協会誌』36

突帯

幅が狭く低い「幅狭低突帯」に限定されています。これは舟塚山古墳の製作にあたって、製作組織内で突帯の形状に関する事前の打ち合わせが行われていたと推測されます。

県内の舟塚山古墳よりも古い古墳の円筒埴輪では、突帯に粘土を付け足すことで（「粘土補充技法」）、太さや高さを強調した突帯に仕上げていました。ところが、舟塚山古墳では粘土補充技法は使用されず、狭く低い突帯となっています。粘土補充技法による突帯の整形には時間がかかることから、作業時間の短縮を目指し、粘土補充技法を使用しない「幅狭低突帯」に統一したのでしょうか。

近畿地方では、古墳時代中期前葉には粘土補充技法が使用されなくなるようです。この辺りの事情をする埴輪工人が派遣もしくは招聘されていたのかもしれません。

透孔

円形のものが主体ですが、方形のものもあります。

また、基底部（1番下の段）にも透孔のあるものがあります。円筒埴輪を古墳に樹立する場合、基底部は墳丘に埋め込まれるので、外から見えないことになります。なぜ見えないところに透孔を入れたのでしょうか。

赤彩

赤彩された埴輪が比較的多く採集されています。焼成後の赤彩で、あずき色に近い濃い赤色です。赤い円筒埴輪列が墳丘を囲むように立て並べられていたようです。

朝顔形埴輪

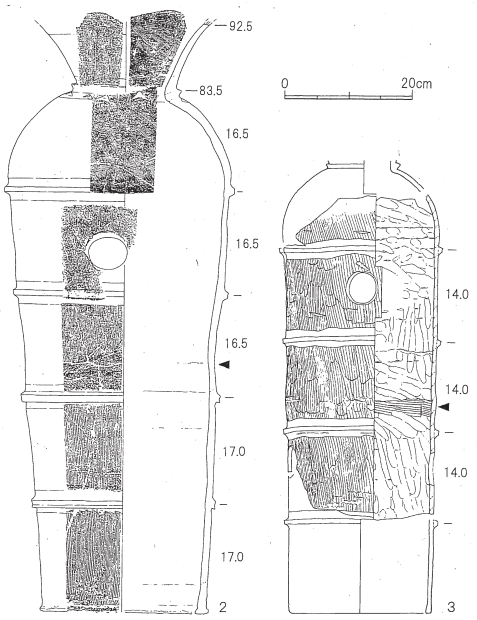
朝顔形埴輪は、口縁部が大きく朝顔の花が開いたようにラッパ状に広がっている埴輪です。器台の上に壺をのせた形を表しています。

樹立状況

朝顔形埴輪も、墳丘各所で採集されています。円筒埴輪列中に、円筒埴輪4～5本くらいにつき1本程度の朝顔形埴輪が配置されていたと考えられます。

規格性

大小2種類の朝顔形埴輪が確認されていますが、製作方法等は共通している部分があります。どのような使い分けがされていたのでしょうか。



▲舟塚山古墳の朝顔形埴輪

白井久美子編2012「古墳時代中期の房総」『研究紀要』27、千葉県教育振興財団

谷仲俊雄・井博幸2023「茨城県舟塚山古墳出土の円筒棺と埴輪」『茨城県考古学協会誌』35

円筒棺

舟塚山古墳では、変わった「円筒埴輪」も出土しています。円筒埴輪と同じような形ですが、それよりも大型。横方向に粘土の帯（突帯）がめぐっていますが、その間隔は通常の円筒埴輪よりも狭い。しかも最上段の突帯は他に比べて突出していて、蓋を受けられるようになっています。また、円筒埴輪に通常ある透孔がありません。

このような特徴をもつのは、円筒埴輪ではなく、人を埋葬するための棺として製作された「円筒棺」と考えられます。

茨城県内では、埴輪を利用した「埴輪棺」は比較的多く発見されていますが、当初から棺として製作された「円筒棺」は珍しく、舟塚山古墳のもので3例目。しかも、もっとも古い事例になります。

「円筒棺」に埋葬された人とはどんな人だったのでしょうか。埴輪製作のリーダーだった人でしょうか。

▲舟塚山古墳前方部出土の円筒棺
谷仲俊雄・井博幸2023「茨城県舟塚山古墳出土の円筒棺と埴輪」『茨城県考古学協会誌』35

形象埴輪

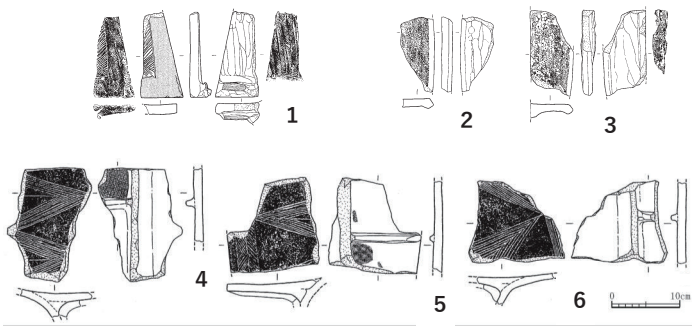
舟塚山古墳では、人物埴輪や馬形埴輪と考えられる埴輪は採集されていません。関東地方で人物・馬形埴輪が採用されるのは5世紀中葉頃ですので、舟塚山古墳はそれよりも古いことになります。

舟塚山古墳で採集されている形象埴輪は、甲冑形埴輪や盾形埴輪、蓋（きぬがさ）形埴輪といった器財形埴輪のほか、家形埴輪の可能性のあるものもあります。これらは近畿地方の有力古墳と肩を並べるような充実したもので、後円部や前方部の頂部の平坦面を配置されていたと考えられます。

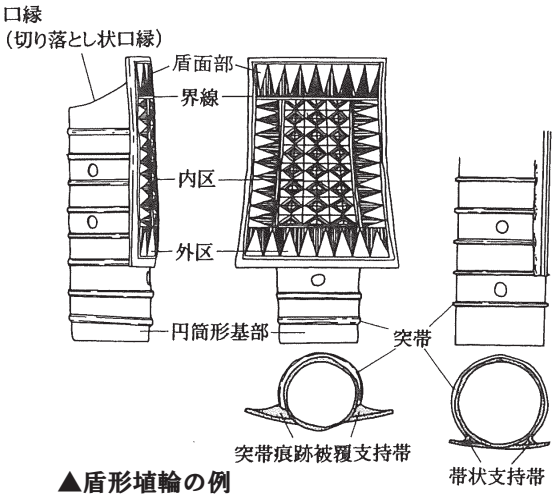
盾形埴輪

盾形埴輪は古墳時代の盾を模した埴輪で、円筒部の前面に長方形の盾面を設けています。盾には、「直弧文（ちょっこもん）」や「鋸歯文（きょしもん）」という邪なるものから護ると考えられる文様がつけられています。

舟塚山古墳からは、前方部で採集された破片（下図1）のほか、舟塚山古墳採集と伝えられる破片（4～6）があります。 その可能性もある破片（2・3）を含め、形態が異なる複数の盾形埴輪が立てられていたと考えられます。



▲舟塚山古墳採集（1～3）
・伝舟塚山古墳採集（4～6）の盾形埴輪
井　博幸2012「舟塚山古墳群をめぐる断想」『茨城県考古学協会誌』24
井　博幸2024「茨城県舟塚山古墳採集埴輪の再検討」『茨城県考古学協会誌』36

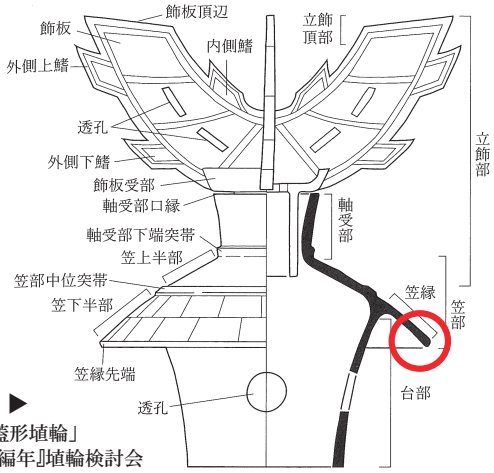


▲盾形埴輪の例
和田　剛2000「形象埴輪から見た造山第2号墳」『造山第2号墳』岡山市教育委員会

蓋（きぬがさ）形埴輪

蓋（衣蓋・きぬがさ）とは、地位の高い人にさしかける傘のことです。舟塚山古墳では破片だけですが、笠部の端（笠縁部・右図中○）と考えられるものです。厚さや端面の形状が異なる複数の破片があることから、多数の蓋形埴輪が立てられていた可能性があります。

また、そのほかにも台部と考えられる破片も採集されています。



蓋形埴輪の例 ▶
金澤雄太2022「蓋形埴輪」
『埴輪の分類と編年』埴輪検討会

舟塚山古墳の埴輪と年代

舟塚山古墳の埴輪は、県内では初めてとなる畿内的特徴の器財形埴輪のほか、円筒埴輪の製作にも新規の技法が導入されるなど、旧来の形・特徴を刷新する画期的なデザインのもとに製作されたと考えられます。

このデザインは、近畿地方の有力古墳での埴輪と共通することから、在地の工人によって創出されたのではなく、近畿地方の有力古墳での埴輪生産の経験をもつ工人に関与によって成立したと考えられます。

埴輪製作に際し、近畿地方から複数の埴輪工人が派遣もしくは招聘され、その工人の主導のもと、多くの地元の工人が動員され複数の小集団を形成して埴輪の製作にあたった。そのような状況が想像されます。

埴輪は黒斑を有することから野焼き焼成によるものと考えられます。その時期は、野焼き焼成から窖窯焼成へと変化するのは5世紀中葉頃であることから、それ以前と考えることができます。これは、5世紀中葉以降に流行する人物埴輪や動物埴輪が、舟塚山古墳には見られないこととも合致します。

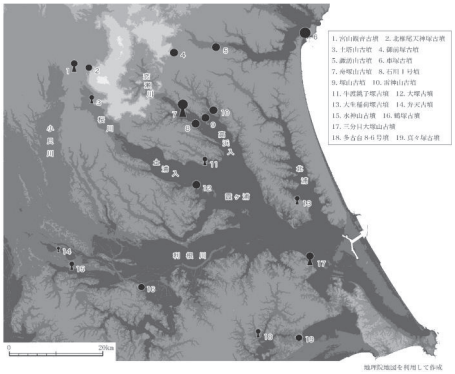
そして、舟塚山古墳に見られる甲冑形埴輪や盾形埴輪、蓋形埴輪、家形埴輪やその特徴、採用された埴輪製作の技術等も合わせると、舟塚山古墳の埴輪の年代は5世紀初頭を前後する時期と考えられます。

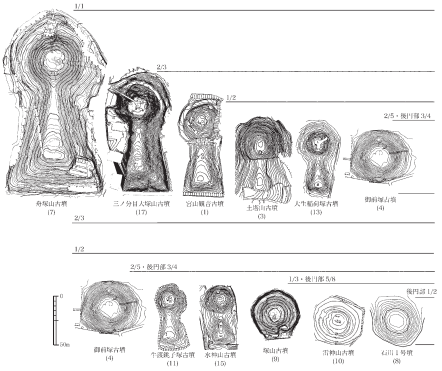
舟塚山古墳体制

舟塚山古墳と類似した埴輪は、笠間市御前塚古墳、小美玉市塚山古墳、石岡市石川1号墳等でも認められます。いずれも大型の円墳ですが、舟塚山古墳の後円部を縮小した形をしています(「舟塚山型」円墳)。しかも、御前塚古墳が舟塚山古墳後円部3/4規模なのに対し、塚山古墳は5/8、石川1号墳は1/2と、規模の大小によるランク付け—上下関係がありそうです。

舟塚山古墳の形を縮小した例は前方後円墳にも見られます。香取市三ノ分目大塚山古墳の2/3規模を頂点に、2/5、1/3と続きます。ちなみに、舟塚山古墳の2/5規模と舟塚山古墳後円部の3/4規模はともに約72m、1/3と後円部5/8は約60m。墳形で示される関係とは別に、規模によるランク付けがありそうです。

埴輪の生産体制を共有するだけではなく、古墳の墳形と規模で表示される上下関係を伴う「政治的結合」—「舟塚山古墳体制」が想起されます。





▲「舟塚山型」の前方後円墳・円墳

石岡市立ふるさと歴史館第38回企画展

舟塚山古墳の埴輪

令和６年10月９日発行

編集・発行
石岡市教育委員会 文化振興課
〒315-0195 石岡市柿岡5680-1
TEL 0299-43-1111
石岡市立ふるさと歴史館
〒315-0016 石岡市総社1-2-10
TEL 0299-23-2398